

学校適応に課題を抱えた生徒との関係づくりの過程
分析と校内支援ネットワーク構築の可能性の検討

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鈴木, 友子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00010226

学校適応に課題を抱えた生徒との関係づくりの過程分析と 校内支援ネットワーク構築の可能性の検討

鈴木 友子

A Study of Relationship-Building with Students with Difficulty Adjusting to School and
the Establishment of a Support System in Junior High School
Tomoko SUZUKI

1 問題の所在と研究の目的

学校教育現場におけるいじめや不登校、暴力行為等の教育課題は、年々複雑化・多様化している。文部科学省は、これら児童生徒の問題行動等の解決を図ることは教育の緊急の課題と鑑み、毎年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」を実施しているが、引き続き深刻な状況が続いている。各学校においては、これら学校適応上の課題を持つ児童生徒に対する支援に取り組んでいるものの、本人に係る内的な要因だけでなく、学校や家庭に内在する外的な環境要因や学校システムにかかわる要因が複雑に絡み合い、対応に苦慮している状況である。さらに、学校不適応の児童生徒への対応を教師一人で遂行するのは困難で、「チーム支援」を基本とすることから、個々の支援者間の対象者観・援助観の違いや、学校組織体制、校外専門機関との連携などとも関連し、問題をより深刻化させている。以上のことから、学校現場における児童生徒の学校不適応の詳細な状況分析や効果的な介入アプローチの在り方、機能的な校内支援体制確立に必要な条件や要因などを明らかにすることが今後ますます必要になると考えられる。

そこで本研究では、学校適応に課題を抱えた生徒 A の支援員という立場でフィールドに介入した筆者（以下関与者と記述）が、A の学校適応の改善を目指した支援活動を複数の支援者とともに実践していく中で、二者関係システムやそれを取り巻く複数の対人システム同士の関係性に着目し、その形成と変容のプロセスを明らかにする。さらに、対人システムを包括的に取り囲んでいる校内支援ネットワークの全体像をとらえ、学校不適応に対する校内支援ネットワークの在り方について検討することを目的とする。

2 研究の構成と方法

本研究は、全 6 章の構成から成り立っている (Fig.1)。研究 I では、生徒 A と関与者との関係性構築過程で生じた特徴的な出来事・エピソードを記述・整理し、関係性の展開に段階をつけて分析・解釈した。

研究 II では、二者関係システムとその他対人システム同士の関係性を明らかにするため、A については支援関係者や同輩との関係性の変化、関与者については生徒 A の同輩との関係性の変化と

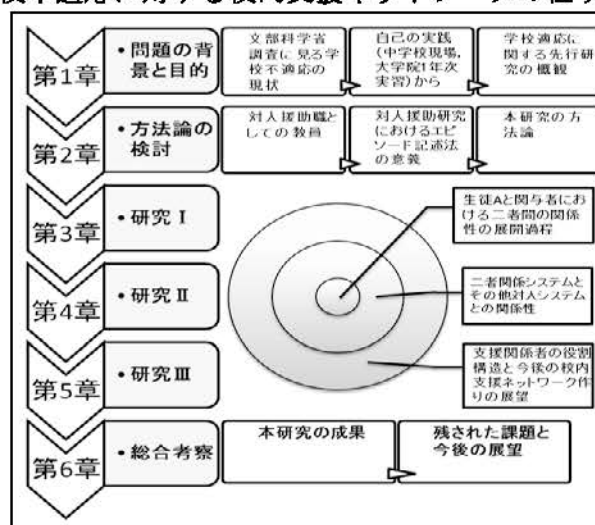


Fig.1 本研究の構成

支援関係者との連携協力関係の変容に着目し、分析・解釈を試みた。研究Ⅲでは、支援関係者の役割構造や校内支援ネットワーク全体における働きを明らかにし、生徒 A 支援をめぐる職員間の関係性や校内支援ネットワークの今後の展望について検討した。

3 研究Ⅰ 生徒 A と関与者における二者間の関係性の展開過程

(1) 生徒 A と関与者との関係性の変化

研究Ⅰでは、支援員としての関与者が支援活動を実施する中で、どのような特徴的な出来事・エピソードが起きていたのかを生徒 A、関与者、双方という 3 つの視点に基づいて記述・整理し、さらに二者間の関係性の展開過程を、第一から第十までの段階をつけて分析・解釈した。その結果、二者間の関係性構築における両者の主体性の比重の相違によって、Fig.2 に示すような 3 つの様相に区切ることが可能であった。まず、1 つ目の様相としては、第一段階から第三段階に至るまでの『関与者の主体性が二者関係を主導している』関係性である。この段階では、関与者が二者関係を主導し、

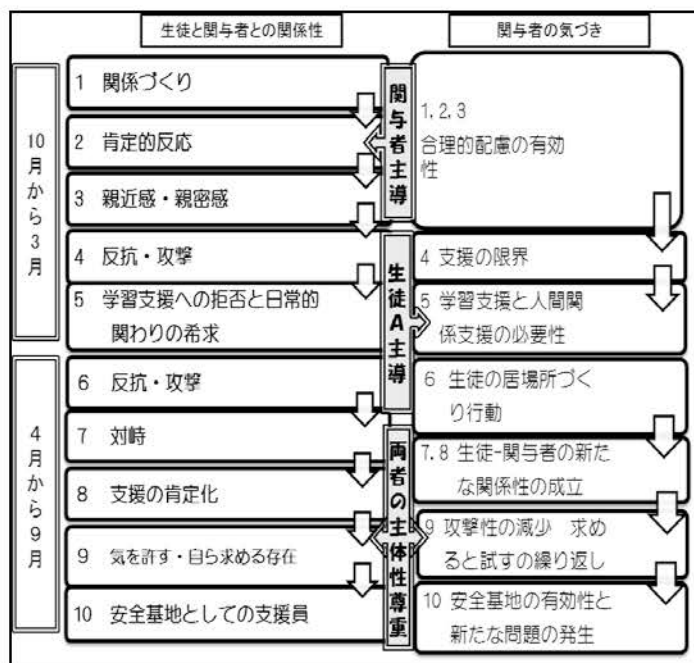


Fig.2 生徒 A と関与者との関係性と関与者の気づきの変化

生徒 A に対して必要と判断した支援を主体的に実施している。しかし、生徒 A が徐々に関与者の意図とは異なる反応を示すようになるなど、2 つ目の様相としての『生徒 A の主体性が二者関係を主導している』関係性への変化の兆しを含んでいる関係性が見られた。続く 2 つ目の様相では、生徒 A が授業逸脱行動や関与者への反抗・攻撃などを主体的に行うことで二者関係を主導し、関与者が事後対応的にかかわる関係性が繰り返された。最後に、3 つ目の様相としては、第七段階の「対峙」場面をきっかけに第十段階に至るまでの『両者の主体性を尊重する』関係性である。この段階では、「関与者の支援行為に対する自己省察」「生徒 A の支援に対する主体的な受け止め」「支援行為に対する両者の合意」といった関係性の展開が見られた。したがって、二者間の関係性は、どちらかが主導的な立ち位置を占める非均衡状態から、協働性・対等性・相補性を特徴とする均衡状態へと質的に転換し、発展していったと考えられる。

(2) 関与者の気づきの変化

生徒 A と関与者との関係性の変化と連動し、関与者が生徒 A と共有した間主観性によって生まれた「気づき」の内容も Fig.2 に示すように段階的に変化し、生徒 A の抱える学習面を中心とした能力面の困難さや関与者との関係性において抱く困難さだけでなく、関与者以外の他者との関係性や学校システムとの関係性などにも広がり、より多角的・多面的に変化していった。したがって、よりよい二者関係の構築をめざすことは、同時に二者を取り巻く対人システムや

学校システムとの関係性にも注目し、包括的に関係発達をとらえることへとつながっていくことが示唆された。

4 研究Ⅱ 二者関係システムとその他対人システムとの関係性

研究Ⅱでは、コアとしての二者間の関係性の展開過程と対比させ、生徒 A 及び関与者それぞれにとっての生徒（生徒 A の学級生徒や友人）あるいは教師（支援員も含めた支援関係者集団）との関係性の変化を、エピソード記述をもとの一つひとつ検証し、解釈していった。このような分析作業の繰り返しによって、以下に示す 2 点が明らかとなった。

(1) 生徒 A の学校適応を二者関係、生徒関係、教師関係の 3 次元でとらえる有効性

生徒 A・関与者それぞれの二者関係、生徒関係、教師関係の変化を重ね合わせる中で、二者関係に対して示す生徒 A の肯定的反応は、生徒 A を取り巻く対人システムの中でも循環していく可能性を秘めていることや、生徒関係の悪化による学校適応の危機的状況の際には、二者関係を生徒 A が主体的に利用したり、複数の支援関係者による受容のかかわりによって支えられたりすることで乗り越えることができたという解釈が生まれた。岡田(2012)は、学校適応を規定する学校生活の諸領域を、生徒間の並列的な関係である横の軸

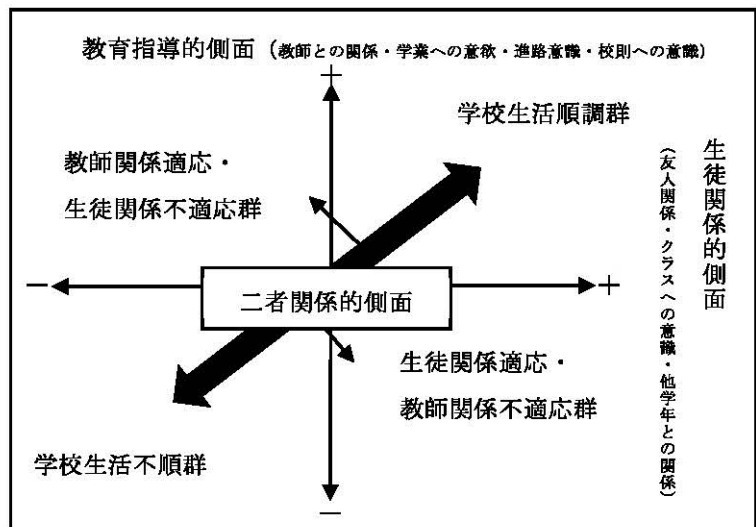


Fig.3 二者関係、生徒関係、教師関係の 3 次元でとらえる学校適応像
(岡田(2012)の生徒関係的側面・教育指導的側面に、二者関係的側面を筆者が加え、作成。)

(生徒関係的側面)と、教育や指導により生徒を導いていく縦の軸(教育指導的側面)という 2 つの側面からとらえ、2 つの側面のどちらか一方でうまくいっている生徒は、その側面が学校への心理的適応の支えとなり、社会的適応についても部分的に支えていることを示している。本研究の場合、生徒 A の学校適応に重要な影響を与える生徒同士の関係性や、教師との関係性の状況的な変動に応じて二者間の関係性も変容し、支援員としての関与者は時には縦軸寄りに関係性を持ち、時には横軸寄りに関係性を持つことによって結果的に 2 つの軸とは異なる斜めの軸という関係性を構築し (Fig.3 参照)、生徒 A の学校適応状態を保つための調整弁的な機能を果たしていたと考えることができる。したがって、岡田(2012)の示す 2 つの側面に、斜め方向からかわる二者関係的側面を加え、Fig.3 のように 3 次元的にとらえることで生徒 A の学校適応の状態像をより多面的にとらえ、さらに、3 つの軸のどの軸を調整する支援が必要(可能)なのかを整理し、その相互作用を活用することで学校適応を促す具体的支援策が明確になるとと思われる。

(2) 二者関係、生徒関係、教師関係の変容が関与者と支援関係者との情報共有・共通理解に与える影響

二者関係、生徒関係及び教師関係の変容は、関与者と支援関係者との情報共有・共通理解の変容にも影響を与えていた。第五段階までは、事後報告・事後対応によって成されていた情報共有・共通理解が、第六段階から徐々に日常的情報共有・事前の共通理解に変化していった。このような変化の要因としては、関与者と学級生徒・生徒Aの友人との関係性の進展が、支援関係者との間で話題や感情を共有する機会をつくり、関係性をより進展させる好循環をもたらしたなど、関与者を取り巻く対人関係システムが質的に転換したことが挙げられる。学校現場においては、情報共有・共通理解というと場やツールの設定、組織の在り方等が注目されやすいが、日常的な人と人との関係性の中で営まれるコミュニケーション活動や会話そのものが情報共有・共通理解の土台となり、校内支援体制を実際に機能させる原動力になると考えられる。

5 研究Ⅲ B中学校における支援関係者の役割構造と今後の校内支援ネットワークづくりの展望

研究Ⅲでは、生徒A支援にかかわる様々な支援関係者が、生徒Aとの関係性の中で繰り返してきた役割に応じた支援活動の具体をまとめ、校内支援ネットワークにおけるそれぞれの支援関係者の役割構造や、ネットワーク全体の中での働きを明らかにした。さらに、なぜそのような役割構造に至っているのかを生徒Aや他の支援関係者との関係性の中でとらえ、今後のA支援の展望を見いだすことを目指した。

(1) 支援関係者の役割カテゴリー間の連動性

支援関係者が日常的に行っている支援活動の具体を10個の役割カテゴリーに統合し、量的・質的な特徴分析や、支援者同士の関係性の分析を行った。その結果、各支援者の役割に応じた支援活動の具体が明らかになるとともに、担任の担っている役割の量的・質的な困難さが顕著に示された。さらに、担任以外の支援者は、担任の役割機能を直接的・間接的にサポートしたり、代替したりして連携して機能しているのではないかと考えられた。そこで、

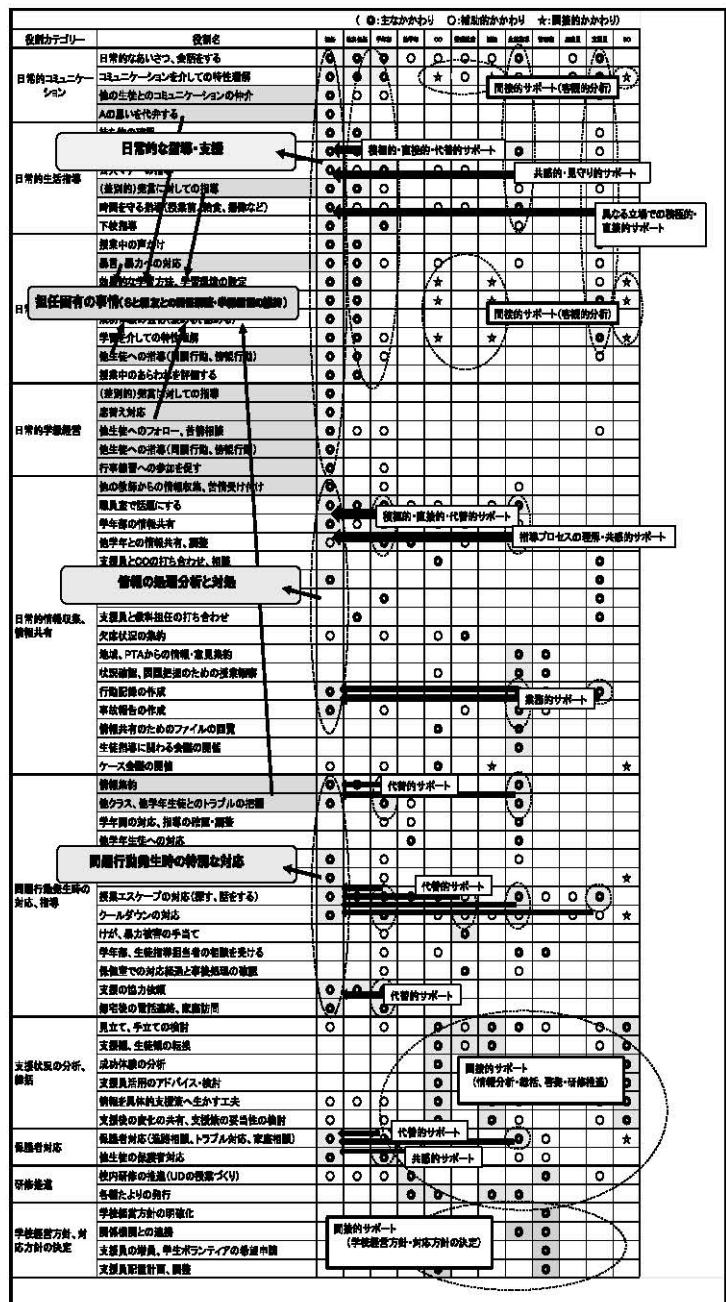


Fig.4 A支援をめぐる職員間の関係構造図

担任を起点としたときに、各役割カテゴリーはどのような関係性があるのかを分析するため、「A 支援をめぐる職員間の関係構造図」(Fig.4)にまとめたところ、B 中学校においては担任サポート機能が各支援者から担任の役割機能へと重なり合って向けられていた。各支援者の担任サポート機能は、それぞれの支援者が校内における自分の立場や期待されている役割、A と自分との関係性を総合的に判断し、自然発生的に生まれたサポートの形とも言える。

(2) 生徒 A 支援の今後の展望

①担任を支えるサポート機能の必要性

担任は通常業務に加え、A に対する「日常的な指導・支援」「情報の処理分析と対応」「問題行動発生時の特別な対応」という 3 つの行動が加算され、さらに A と級友との関係調整・学級機能の維持を考慮した対応・処理が求められるという担任固有の事情が働くために、量的にも質的にも困難さが増加すると考えられる。したがって、担任であることに伴う困難さを他の支援者が理解し、担任を支えるサポート機能をいかに構築していくかが重要な視点になると考えられる。

②担任サポート機能を重厚にする役割連携の意識づくり

それぞれの担任サポート機能は単独で役割分業的に働いているのではなく、重なり合う部分が多くある。この重なり合う部分への意識を滝(2011)は「役割連携」という言葉で表現し、その重要性を指摘している。担任サポート機能を重厚にする役割連携の意識作りには、個人レベルでの日常的な積極的コミュニケーションに加え、いつでも何でも話し合える学年部づくりや、ネガティブな感情をも出し合える学年の枠を超えた教師集団づくりを目指していくことが必要であろう。

③人や情報をつなぎ担任サポート機能を調整する役割が複数存在する校内支援ネットワーク作り

担任サポート機能をより効果的に機能させるには、その時々で最も適した人物が人や情報をつなぎ、各支援者のサポート機能を柔軟に調整する役割となりうる組織体制の構築が求められる。効果的なつなぎ役・調整役として機能するには、個人の努力や裁量だけでなく、研修の機会の設定や教員養成課程の段階での学びも今後は必要になると考えられる。

6 総合考察及び今後の展望

(1) 学校適応に課題を抱えた生徒との二者関係の仮説的な展開モデルの生成

本研究では、支援者と被支援者双方の主体性を含めた関係発達の視点で二者関係をとらえ、直接見ることのできない情動の動きや、支援者と被支援者との関係性の変容などに注目し、二者関係の仮説的な展開モデルの生成を試みた(Fig.5 参照)。本研究で提示した展開モデルは、支援活動の当事者ゆえに気づきにくい関係性の中で生じる課題の発見や、対象生徒の示す言動の意味を問主観的に「わかる」ことに生かされ、各支援者の自己省察

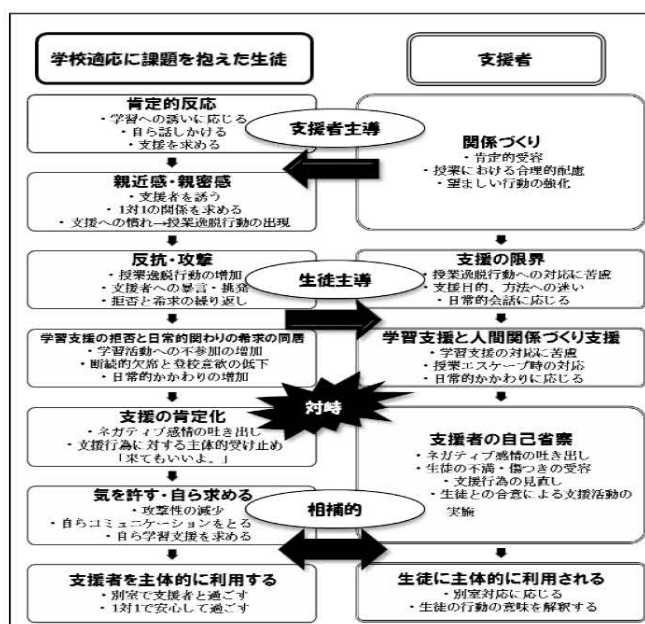


Fig.5 学校適応に課題を抱えた生徒と支援者の関係性の仮説的展開モデル

と子ども理解を深める上での一助となり得ると考えられる。一方で、本研究の展開モデルはどの二者関係においても直接的に活用できるものではなく、その意味で汎用性や一般性に課題があるかも知れない。しかしながら、本展開モデルを提示する意図は、他校で別の支援者が困難を抱えている生徒に対する支援を実践する際に、「関係性に着目して見る」とはどのようなことであるのかという問いに一つの視点を例示することにより、それぞれの支援者はそれぞれが置かれた状況や支援対象生徒の特性などに応じて自身の展開モデルを独自に生成することが重要である。したがって、本展開モデルをどのような場面で、どのように活用していくかが今後の課題であり、活用可能性を検証していくことが求められる。

(2) 二者関係システムの変容がその他対人システムに与える波及効果

これまで、各学校においては学校不適応の児童生徒への支援に時間と労力を費やしながら取り組んできたが、様々な要因が複雑に絡み合っている上に、一人ひとり適応の状態像が違うことから、具体的で効果的な介入アプローチが見出されないまま対応に苦慮する状況が続いている。本研究では、こうした課題の解決と、困難を抱えた支援対象生徒をより多面的にとらえることを指向し、適応の状態像を3つの関係性で整理し、その相互作用の特徴を支援に結びつける一方法を示した。しかし、実践場面での活用には至っておらず、具体的介入アプローチの生成にどの程度効果的であるかの検証はこれからに委ねられている。今後は、困難を抱えた生徒支援に実際に適用する場面を設定し、これら残された課題の検証を進めていく必要がある。

(3) 校内支援ネットワーク構築過程に生起する、支援関係者の関係性の変容

本研究では、校内支援ネットワーク構築過程に生起する支援関係者の関係性の変容の特徴として、①生徒の情報共有・共通理解の質的な変化、②「相互性」と「自発性」に基づく『役割連携』への意識の醸成、③人と情報を結び付け、校内支援ネットワークに機能的な動きをつくり出す支援者の変化、の3点を論じた。しかし、本研究で得られた3つの視点が、学校規模の異なる中学校や、別の対象生徒・教員集団においてどの程度当てはまるのかについては、さらに検討することが課題である。また、本研究では、関与者としての観察記録を主に、面接逐語録、その他校内文書資料を補助的に加える形で分析を進めたが、校内支援ネットワークの中心となり、日々支援活動に当たっている教員から見た校内支援ネットワークにおける支援関係者の関係性の変容についても分析していく必要がある。

最後に、本研究を通して追究してきた「校内支援ネットワーク」とは、単に人と人が出会い、かかわるだけでは成立しないものであり、かかわりの中から互いの主体性を尊重し合う関係性が生まれ、かかわることの意味や必要性を見出してこそ、ネットワークとしての強いつながりが生まれるものである、という点を強調したい。

【主要参考文献】

- 岡田有司 2012 中学校への適応に対する生徒関係の側面・教育指導的側面からのアプローチ 教育心理学研究, 60(2), 153-166.
- 滝充 2011 小学校からの生徒指導—『生徒指導提要』を読み進めるために— 国立教育政策研究所紀要, 140, 301-312.
- 榊原久直 2011 自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障の発達の変容—相互主体的な関係の発達とその様相— 発達心理学研究, 22(1), 75-86.
- 榊原久直 2013 自閉症児と特定の他者とのあいだにおける関係障の発達の変容(2)—主体的能力・障特性の変容と特定の他者との関連— 発達心理学研究, 24(3), 273-283.